

ハッカハムシ 体長9mm  
薄荷金花虫 (ハムシ科)  
学名: *Chrysolina exanthematica*

発見した虫や飼育中の虫を持ってきてくれる。「よくわからんがハムシには違いなさそうだ。ゴミムシダマシかもしれない。」と、引き出しから10倍のルーペを取り出して観察すると、そいつの背中には黒い点が幾筋も並んでいた。初めて見る奇抜な模様だった。興味がわいたので、「たぶんハムシだけど、調べたいので、ちょっと預らせて」というと、彼はやや不安かつ不審な表情で虫を置いて行った。

それは鞘翅の模様の特徴から、ハッカハムシであると判明した。ハッカはシソ科の植物であるが、この虫はシソ科の植物を食草にしているらしい。道端や公園などでよく見かけるシソ科の草といえばホトケノザがあるが、これを食べているのかもしれない。わが家の花壇（というか雑草無法地帯）でシソ科の植物といえば、シソやミントがある（好き勝手に生えている）のだが、未だこの虫を見つけたことはない。

ハムシの仲間は、ほかの昆虫と同じく成虫で冬を越して春に産卵するものや、秋に産卵して卵で越冬するものなど様々である。それは食草が冬に枯れるか枯れないかの違いが関係するのだろうか。気温の低い冬は活動しないので、食草の有無は関係ないのかもしれない。ハッカハムシはどのように冬を越すのだろうか。11月の下旬に見つかったことから、成虫越冬の可能性が考えられる。

わずか1cm未満の小さなハムシだが、実顕顕微鏡で見ると、その表面はまるで金属の鎧（よろい）のように光沢を放っており、その光沢が見る角度によって紫や藍、緑などに輝く。そして微細な穴や溝や突起が精巧な彫金細工のように刻まれている。この様な装飾が脚や触角などの一節ずつに完璧に施されているのだ。なぜそのような模様や色になったのか、どんな必然がそこにあったのか？金属の工芸品のようなこの虫が動き回るのを見ると、まさに奇跡としか思えない命の不思議に驚きと感動を覚える。

やはり甲虫はおもしろい。甲虫はカブトムシではなくコウチュウと読んでほしい。昆虫の中で最も種の数が多く、様々な形態や色彩で驚かされることが多い。なかでもハムシの仲間は多彩である。

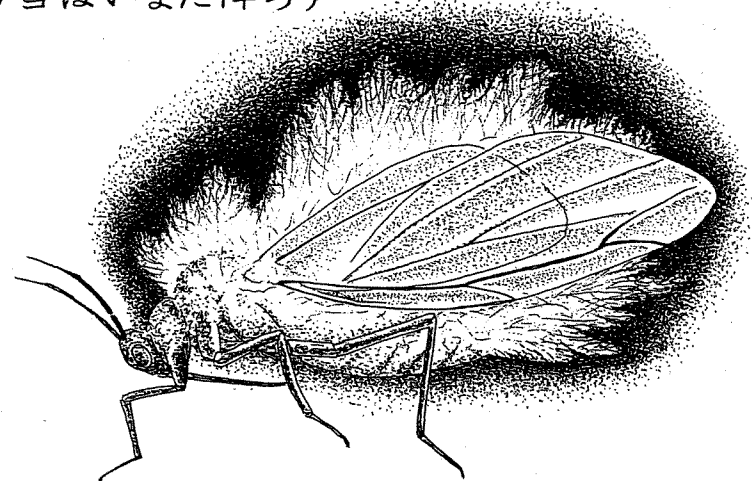
11月26日、5年生の男子が「サンゴ樹公園で見つけた」といって、小さな黒っぽい甲虫を持ってきた。彼はクワガタやカブトムシなどを多数飼育する虫匠（昆虫熱中人）で、時々

アブラムシの仲間

体長3mm

アブラムシの中で翅があり、白い綿状物質を分泌するものを綿虫（わたむし）という。特に北国では雪虫という。

有性生殖を行う世代として秋の終わり頃に現れる



11月11日暖かい日だった。庭の掃除をしていた妻が小さな白い虫を見つけた。それは2mmほどのアブラムシだった。アリマキとも呼ばれるが、春先にカラスノエンドウやウメやハリエンジュの新芽などに、びっしりと群れている小さな昆虫である。針のような口吻で植物の茎から汁を吸って生きている。庭で見つけたものには透明な翅がついていて、体の後半部が白いワタのようなもので包まれていた。「これって、雪虫じゃないか？」私の頭には小学生の頃のある記憶がよみがえった。

春から夏の間、アブラムシのメスの成虫（母虫）はオスと交尾することなく、幼虫を次々生んで仲間を増やしていく。生まれるのはすべて母虫と同じメスで、この時期オスはいない。このメスがまたメスの子を産み、という具合に増えていく。これは単為発生というが、たった1匹のメスが短期間に大きな集団を作るのに都合がよい。しかし単為発生では親と同じ性質の子しか生まれられないため、環境の変化や病気に対して脆弱である。そこで母虫は、秋になり命を終える前に翅の生えたオスとメスの子を産む。これには翅があり、風に乗って遠くに飛び、他のオスやメスと交尾して卵を産む（有性生殖）。その結果、この卵はから生まれる子には親のオスとメスの様々な性質がミックスされているため、環境の変化に対しても全滅するリスクが低い。卵は冬を越して春に孵化して新しい母虫になる（すべてメスが生まれる）。そして再び単為発生を繰り返し、夏までに短期間に数を増やしていく。もっとも、その多くは他の肉食昆虫の餌として食われてしまうので、天敵のいる環境では一定数以上には増えないようだ。

今回庭で見つけたのは、有性生殖を行う翅の生えたアブラムシで、身体には白い綿状の蠟（ろう）物質をまとっている。この蠟物質は凧のように風に乗って遠くに運ばれるのを助けているという。白いアブラムシがたくさん舞うとまるで粉雪のように見えることから北国では雪虫と呼ばれる。北海道では雪虫が舞うと数日後に初雪が降るといわれている。毎年秋の終わりには雪虫が大発生してその密度はすごく吹雪のようになり、自転車で走る学生の黒い制服がくっついた虫で白くなる程であるという。

私の記憶というのは、秋の終わり頃に高砂市のある公園で野球をしていたとき、夕方になってだんだん白い虫があたりに漂い始め、雪が舞うように見えたというものである。

井上靖の小説に「しろばんば」というのがあるが、これは雪虫のことをさす東北地方の方言である。なんとなく、暗い冬を前にした雪国の沈みがちな気分を感じさせる。